**症例記録**

**申請者氏名:　慢性　とつこ**

**所属機関名: 慢性クリニック**

(10症例の治療経過を記載下さい)

※慢性疼痛以外は受け付けておりません。

（看護師用）治療期間は、**3カ月以上の　　事例**を記載してください。

※略語の使用について:症例報告へ初出の際には、オリジナルの単語を記載の上でご使用下さい。

※最終診療日または直近の診療日は5年以内となります。

|  |  |
| --- | --- |
| **症例No.1** | **治療機関名:慢性クリニック** |
| **患者イニシャル:　T. M****患者性別　　　　男・女****患者年齢　　　　　50歳** | **初診日:　2021年2月12日　最終診療日または直近の診療日:2021年6月30日****病　名:　慢性腰痛症****看護介入: 痛みと増強因子の把握、家族を含めた生活調整** |
| **治療経過(400～600字)】**【事例】20X1年春に娘が大学に入学し一人暮らしを始めた頃に、腰痛、下肢の痛み、痺れが出現。20X2年2月に整形外科で慢性腰痛症の診断、投薬加療とウォーターベッドのため週1回通院中であった。夫と姑の3人暮らし。家族とのコミュニケーションが痛みに関与するかもという整形外科医師からの依頼で介護介入することとなった。事例介入時、杖を使って歩行する状態であったが家事はM氏が一人で行っていた。またM氏にとっての生きがいは子育てであった。姑は物とられ妄想などがみられた。【査定】・発症前は主婦として生活していたが、娘が一人暮らしを始めたことをきっかけに行動範囲が狭くなったか。・趣味もなく、孤立感が募っていたか。・全部自分で家事をしなければという思いが強く、過活動になっているか。・姑の介護度の確認が必要か。**痛みに対し専門性を持って査定し、****それに対しどのような看護介入を行ったか**を具体的に記載してください。【介入/ 経過】・M氏の生活背景と痛みの経過を傾聴し家事の一切を一人で行っていることに対しねぎらった。・痛みが出現する前の生活と痛みが出現してからの24時間の生活とを比較し、活動量の減少をM氏自身に気づきを促せるように話しをし、散歩を提案した。・ケアマネージャーを介し、姑の介護認定の変更を行った。・夫に病気に対する理解をもってもらうよう、医師との面談を提案した。【この事例から学んだこと】元来過活動で無理しているため出来ていることを認めるかかわりが重要であり、また対象者の年代、生活背景、役割を理解することによって、増強因子を把握する看護介入について学んだ。さらにキーパーソンの家族の理解と社会資源の活用が重要であることがわかった。【この事例から学んだこと】は経過をまとめただけでは意味はありませんので、ご注意ください。 |

\*

※この用紙をコピーしてお使い下さい。